M男との関わりを通して感じたこと

大久保　裕美

M男は年中組二学期に私の担任するクラスに途中入園してきた。

乗物が好きなM男は、電車の絵を描いたり、ブロックで電車や車を作ったりする遊びを好んでいた。同時期に途中入園したS男は自ら友達との関係をもつことで安定していったようだが、M男は一人黙々と自分の好きな遊びに取り組むことが多かった。私はM男に対して、初めての環境ということもあり、まずは自分の好きな遊びを見つけ、安心できる場を持って欲しいと願い、関わっていた。

しかし、二学期後半になっても何となく不安そうな様子のM男に私もだんだん焦り始めた。やはり、友だちとの関係も安心して生活できる要因の

一つになるのではないかと考え、M男の好きな遊びを通して友だちとの関わりが持てるようなものはないか、とビニールテープを使っての線路作りを提案してみることにした。他にも遊びに打ち込めない様子の人たちがおり、気にかかっていたので、何かが変わるきっかけになれば……という思いもあった。

保育室の床（フローリング）にビニールテープを貼って線路を作ることを私が始めると、何人かの電車好きな人たちが集まってきて、盛り上がり始めた。私はM男も誘い、共に楽しんだ。この遊び自体は一時的にしか盛り上がらなかったが、やがてM男は自分の好きな電車の絵を描いたりブロックで電車や車を作ったりする遊びに加えて、電車好きな仲間と共にホールの大型積み木で電車を作るなど少しずつ世界を広げていっているようであった。

年中組三学期になると、今度は子ども達からビニールテープの線路作りが始まった。M男もその一員であった。二学期にはただビニールテープを貼ることを楽しんでいた遊びが、今回は一人一人がイメージを持ち、線路だけでなく、道路や横断歩道、郵便局など床の上を街のようにつくっていった。私の中にはビニールテープを床に貼って街をつくる、という発想がなく（私の発想は〝線路をつくる〟というところで終わっていた）、改めて子ども達のイメージの豊かさを感じた。

M男は、周りの友だちが他の遊びに行ってしまっても、一日中道路を作り続けていた。そんな様子を見ていたクラスの人たちから「M男くんすごい！　おもしろい！」と言われ、M男は自分に自信を持つきっかけを得たようであった。そして、M男は今まで以上に自分の好きな遊びに夢中で取り組むようになっていった。

M男は、線路作りを継続しながら、空き箱を使って車を作る遊びにも夢中になった。ペットボトルの蓋で作ったタイヤを空き箱につけて走らせる。この車作りも以前、私がM男に作って見せたことがあり、M男はそれを覚えていて作り始めたのではないかと思われる。初めは保育室の中で走らせていたが、次第にスロープ（園舎の一階と二階をつないでいる）でも走らせるようになった。スロープは傾斜があるため、スピードが出るが、真っ直ぐ走らないと途中で止まってしまう。M男は「どうして真っ直ぐ走らないのだろう……」と試行錯誤を始めた。私はM男に「自分で気づく体験をして欲しい」と考えながらも内心では「気づけなかったらどうしよう、いつ頃私が関わっていくのがいいのだろう」と悩みながら、しばらく見守ってみることにした。するとM男はあるとき「タイヤが真っ直ぐについていないからだ！」と言い、自ら気づくことができた。このときのM男の喜び、感動はとても大きなものであり、それを共に感じられた私にとっても大きな喜び、感動であった。

年長になり、保育室が変わってもビニールテープの線路作り、空き箱の車作りは継続して楽しんでいた。

年長二学期のある日、M男は「前のタイヤが動けばカーブできるんだよなあ……」と、方向転換

できる車を作り始めた。M男は、どうやって前のタイヤを可動にするのか悩んでいた。ものを作ることが好きなM男であるし、以前にもだいぶ試行錯誤をした経験もあったので、今回は、私は安心してM男を悩ませることができた。その日は前輪を可動にできるアイデアが浮かばず、降園となってしまった。

そして翌日、M男は朝一番に「昨日、お母さんに相談したんだ」と車作りを再開した。母親にアイディアをもらったようで、どうにか自分のイメージを形にすることができた。家に帰ってもこの車のことを考えていたことにM男の思い入れの強さを感じた。

三学期になり、クラスでは劇遊びが盛り上がりをみせた。二月に〝お楽しみ会〟と称して子どもと保護者が共に楽しむ日があり、年長組ではそれまで楽しんできていた「ジャックと豆の木をみんなで演じよう」ということになった。M男は、入園当初からクラス全体が参加するような活動（例えば、降園前に「椅子取りゲームをしよう」など）には参加したがらなかった。この劇遊びも同様で、保育者が少しでも興味を持って欲しいと願い、誘っても「見てる」と言い、積極的に参加する様子はなかった。私は「そういう参加の仕方もある。いつかM男の気持ちが動く日が来るかもしれない。」とM男の思いや姿を認め、受け止めようと考えた。しかし一方では、実は「どうにかして少しでも興味を持ってくれないかな、参加してくれないかな」と思ってもいた。

三学期のある日、一、二学期と同様にクラスでジャックと豆の木の劇遊びを始めると、M男はジャックになったり、大男になったり……とごく自然に劇遊びに参加していた。私は誰よりもストーリーの流れを理解し、いろいろな役にチャレ

ンジするM男の姿をみて、M男は今までこの劇遊びを見ているだけだったのではなく、体は動いていなくても気持ちはしっかり参加していたのだ、友だちの姿を見ていたのだと気づいた。そんなM男を理解できずに何度もしつこく誘ったことを反省した。

そして、M男は〝お楽しみ会〟の役を決める際に、自ら「ジャックをやりたい」と立候補した。クラスの雰囲気がお楽しみ会に向けて盛り上がる中、M男もお楽しみ会に向けて積極的に動き出すのかと思いきや……自分の好きな空き箱の車作りに打ち込みつつ、周りの様子を感じ、お楽しみ会へ向けても意欲的に取り組みはじめた。私は、このようなM男の姿に自分の好きな遊びも大切、クラスの活動も大切と感じ考えているのだな、と思い、嬉しくなった。

私は、M男との約一年半を振り返ってみて、そのときは気づかなかった、あるいは気づけなかった様々なことがみえてきた。

M男は自分の興味から取り組んだ様々な遊びを通して試行錯誤する体験を積み重ねてきたように思う。ビニールテープの線路作りや空き箱の車作りでは、私が提案したときと自ら取り組み始めたときとでは、M男の様子は全く違っていた。私が提案しなければ、M男はこの遊びに出会えなかったかもしれないが、私が提案したときからしばらく時間をおいて、再度自分で選んだ遊びだからこそ、そこにはM男の思いが多く込められており、イメージが膨らみやすく、不思議に思ったり、試行錯誤したり……という体験がより深くできたのではないかと思う。そしてこのような体験を積み重ねてきたことが、今になって確実に、M男の力になっているのではないかと思う。

M男の友だちとの関わり方の変化も今になって気づけたことの一つである。

年中三学期に仲間とビニールテープの線路を作っているときは、友だちの側で友だちの存在を感じながらも、自分一人の世界で楽しんでいたように思う。偶然友だちと繋がったり、友だちの作っている姿をみたりすることを楽しんでいたようである。

年長二学期になり、方向転換できる車を作っていたM男は、言葉で自分のイメージを友だちに伝えていた。更にその後、初雪の日に除雪車を友だちと二人で作り始めた際には、お互いのイメージを伝え合いながら、お互いのいいところを真似しあう姿もみられた。そして、三学期には集団での劇遊びに意欲的に取り組むM男の姿があった。

こうみると、M男の気持ちや周りの環境への興味、思いなどが、初めは自分の内に向いていて、次第に周りの人や環境にも向いていく様子がみえてくる。

また、自分の好きな遊びにじっくりと取り組むことを通して様々な体験をしてきたことが、お楽しみ会のような大きな活動の中でも活き活きと動くM男の姿に繋がっていったのではないだろうか。

毎日の保育に追われていると、なかなか長期に渡っての一人一人の育ちや自分の関わり、認識の偏りを振り返る時間がないのが現実だが、こうして一人に焦点を当て、長期に渡って振り返ってみると、様々なことが見えてきて、自分の保育を深めていくきっかけになったと思う。またM男について言うならば、M男が幼稚園で体験してきたことはこんなにも意味深いものだったのかと改めて感じ、日々の子どもたちの遊びについても考えることができた。

（駒場幼稚園）